

学生による授業評価における学生側要因

松尾 太加志 近藤 倫明
(北九州市立大学文学部)

key words: 授業評価, 学生側要因, 教員評価

学生による授業評価を教員の教え方の評価に用いることの妥当性については、さまざまな見解がある。松尾・近藤(2005)は、同じ授業(「心理学実験」)で2002年度と2003年度の授業評価の回答結果を分析したところ、回答項目の中に統計上有意味な差がみられ、全体的に2003年度が低い評価であった(図1)。しかし、授業内容や教材、担当者も同じであったことから、教員の教え方の要因ではなく、学生のもともとの興味・関心の違いではないかと推測した結論を提起した。

ただし、その結論は学生の興味・関心について実証的なデータを示したのではなく、結果の解釈のひとつにすぎなかった。そこで、本研究では、学生のもともとの興味・関心が年度によって異なったのかどうかを調べるために、2002年度と2003年度の「心理学実験」の受講生に、「心理学実験」を受ける前の2年生の4月の段階で、どのような心理学の分野に興味があったかを質問紙により調査し、松尾・近藤(2005)の結論の有効性について検討を行った。

方法

被調査者 「心理学実験」を受講した学生。2002年度受講(男6,女18),2003年度受講(男5,女18),2004年度受講(男5,女23)の計75名。ただし、2004年度の受講生については、因子分析の際のデータとしてのみ利用。

質問紙 心理学の各分野に関する項目を20項目挙げ、それぞれについて、「心理学実験」を受講前の2年生の4月段階で、どの程度興味があったかを5件法で尋ねた。項目は、被調査者が所属する大学の心理学系のゼミの分野に関わるものや開講されている心理学関連の科目を参考に著者を含め心理学を専門とする教員3人の意見をもとに定めた。また、当時、どのゼミを希望していたのかを回答してもらった(複数回答有り)。

手続き 2005年1月に実施。2004年度受講生は対象学生が全員受講している科目の学期最後の時間において実施。2002・2003年度受講生は各ゼミの担当教員に質問紙を渡し、ゼミの時間などを利用して回答してもらった。

結果

20項目について因子分析(重み付けのない最小二乗法,プロマックス回転)を行い、解釈可能性も考慮して内的過程志向,カウンセリング志向,実証科学志向,対人心理志向,発達心理志向の5因子を抽出した。その5因子の因子得点の平均値を受講年度ごとに算出した(図2)。受講年度間の違いをみるために、t検定を行ったが、どの因子においても有意な差はみられなかった。

ゼミの希望について、実験系のゼミ(認知心理学,コミュニケーション論)と臨床・社会系(臨床心理学,社会心理学)の2分類を行い、受講年度ごとにその数を集計した(表1)。2003年度のほうが臨床・社会系のゼミの希望が多く、有意に独立でないことが示された($\chi^2=6.58, df=1, p<.05$)。

考察

心理学に対する興味については、2002年度と2003年度において違いはみられなかった。1年10ヶ月,2年10ヶ月前を振り返っての回答を求めたため、必ずしも、その当時の興味関心が回答結果に現れなかった可能性もある。また、授業評価は匿名での回答であったため、興味関心の回答と授業評価の回答の個人を対応させたデータ分析ができなかったところに、差異が見出されなかった可能性もある。

希望のゼミに関しては、2003年度の受講生は、臨床社会系を希望しており実験系に対する興味が低かったことが示された。この結果は、松尾・近藤(2005)の解釈を裏付けるものであり、学生の興味・関心が低かった場合、それが授業評価の結果を低下させる要因として働いていることを示唆するものである。

引用文献

松尾太加志・近藤倫明 2005 学生による授業評価は何に役立つのか 北九州市立大学文学部(人間関係学科)紀要, 12, 51-64.

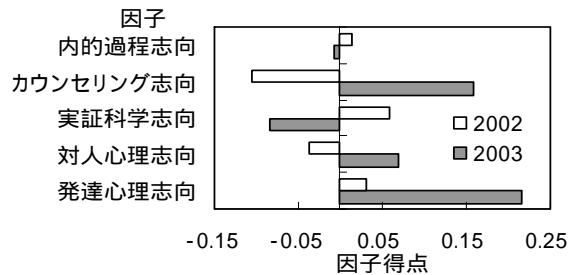


図2 年度別の心理学に対する興味に関する因子得点の平均

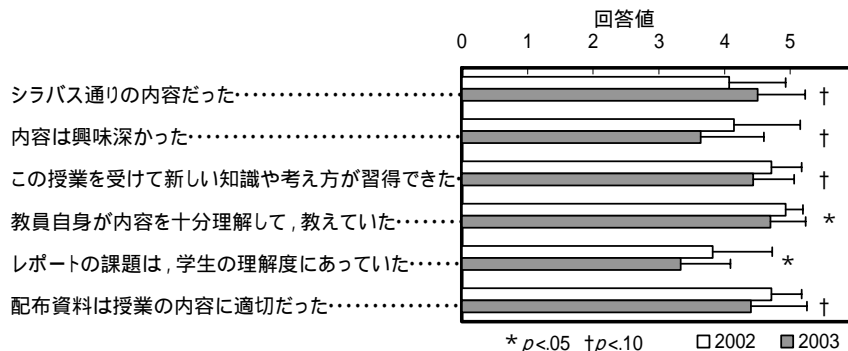


図1 授業評価質問紙において年度間で有意差あるいは差に傾向があった項目。松尾・近藤(2005)のデータによる。

表1 年度別の希望ゼミ(重複回答)

年度	希望ゼミ		計
	実験系	臨床社会系	
2002	7	19	26
2003	1	30	31
計	8	49	57

(Takashi Matsuo, Michiaki Kondo)